

大東文化歴史資料館だより

第5号 2008.11.30

百年史編纂事業に向けて・七十年史編纂の経験から

元大東文化大学教授 濱 久雄



『大東文化大学五十年史』の編纂から、20年の歳月を経て、5学部13学科に発展した『大東文化大学七十年史』が平成5年9月20日に出版された。創立70周年記念事業記念出版推進委員会が設立され、たまたま私は委員長を拝命した。

本史編纂は三つの柱で構成された。一つは創立50年の経緯を要約し、その後の20年間の軌跡をまとめる。二つは学園の中核である大東文化大学の学部・学科が設立されるに至った経緯と現状、および明日に向けての使命と展望を記述し、さらに大学院・各研究所および図書館、情報化に対処する情報機関などの充実度を示した本史の主題とする展望編。三つは文科系総合大学としての、学園の組織現況をまとめる資料編である。

多くの会議を経て学部学科の執筆者も決まり、校務の暇をみて、それぞれ資料の収集と執筆に専念していただいた。特に本史編纂のために、あらかじめ長期にわたる資料収集が組織的に行われたわけではなく、むしろこの機会を通じて、貴重な資料を意欲的に収集して、今後の年史編纂に役立つ意図を再確認した次第である。従って、卒業生の方々から、種々の手記・記録資料・写真等を提供していただいた。こうして、とにかく50年史に比較して、百尺竿頭、さらに一步を進め得たつもりであった。

しかしながら、私が定年退職した後、教育学科の尾花清教授から、詳細にわたる『七十年史』読後感が寄せられた。特に皇道に醇化した儒教を標榜した本学創立の特異な時代思潮は、戦後の民主主義を受容した時代と、まさに相容れないものがあつた。したがって、建学の精神も、新時代にふさわしい内容に変えざるを得ない。しかし、これらの問題に対し、七十年史は五十年史を踏襲し、何らの思想的超克、ないしは歴史的反省もなく、安易に記述されている点を指摘され、これらはすべて破棄すべきであると酷評された。

事実、これらの問題につき、特に矛盾^{てつりつ}を別抉して、論義の俎上にのぼらそうとする意見は無かつた。この種の問題は、時代の変革を経た今日、伝統の長い大学で、新旧思想の乖離が顕著な場合、その歴史的記述は困難を伴なう。しかし、歴史的な事実は謙虚に受け止め、建学の精神も時代の変化に応じて、新時代にふさわしい内容に改めることは、当然である。ただそれらの記述方法に関する内容が不十分であることは、認めざるを得ない。

なお、本史編纂に当たり、児玉花外作の学生歌の一番の最後の歌詞が、いつの間にか「雪に聳ゆる芙蓉峯」となっているのに気づき、雪は雲に改めるべきだと提案したところ、みな納得された。私と同じ年の佐藤定幸学長も、「雲に聳ゆる高千穂の」（紀元節の歌）とある歌詞を思い出されて支持された。ところが、出版後の学生歌は依然として「雪」となっていた。私が真相を調査したところ、原田種成先生が編集委員の佐藤宏学生部長にそのままよいと示唆されたので、やむを得ずそうされたことが判明した。その結果、『八十年誌』も同様となっているが、児玉花外氏の名誉のためにも、訂正すべきである。

(大東文化歴史資料館運営委員)

大東アーカイブス 第6回 企画展

大東文化学院創設をめぐる人々(Ⅱ)

～大木遠吉と大東文化協会～

展示期間：平成20年10月6日(月)～平成21年3月27日(金)

(開室時間 毎週月～金曜日 9:00～17:00)

展示場所：大東文化歴史資料館 展示室(板橋校舎2号館1階)



大東文化歴史資料館では、本学創設期の指導者群像を確かなものとし明らかにしていくために、その関係資料を集集・整理しつつ、順次公開することを予定しています。

現在、その第2弾として、大東文化協会初代会頭・大木遠吉展を開催しています。遠吉と大東文化協会との関わりとともに、書と漢学の大家として知られた遠吉の掛け軸の数々を紹介しています。

大木 遠吉 (1871(明治4)年8月～1926(大正15)年2月)

大東文化協会初代会頭。初代文部卿・大木喬任の嗣子であったが、生まれつき病弱だったことから学校教育を受けることなく、自宅で大木喬任の膨大な蔵書に囲まれながら、父や家庭教師から教育を受けた。1899(明治32)年9月に父喬任が亡くなると、同年11月伯爵を襲爵した。

1908(明治41)年に貴族院議員となり政界に入ると、伯爵同志会を組織して官僚系議員団と対抗し、1919(大正8)年には伯爵団と研究会(貴族院における院内会派のひとつ)との合同を実現させた。1920(大正9)年より原内閣及び高橋内閣における司法大臣をつとめ、1922(大正11)年には加藤友三郎内閣の鉄道大臣として入閣した。内閣総辞職による退官後は研究会の幹部として、政友会と政友本党との合同問題に尽力する。大東文化協会会頭のほかに、帝国公道会会長、大日本国粋会総裁、帝国農会会長など民間諸団体の役員も多かつとめ、国粋主義者としても知られた。1926(大正15)年2月14日、九州別府からの帰途、京都の客舎にて心臓麻痺のため死去。

大東文化協会と遠吉

1923(大正12)年2月11日、かねてより提議されていた「漢学振興二関スル建議案」の理念にもとづき大東文化協会が創設され、同年9月20日には財団法人となった大東文化協会の規約第一条の二「本邦現時ノ情勢ニ鑑ミ儒教ノ振興ヲ図リ及び東洋文化ヲ中心トスル大東文化ヲ設立維持スルコト」とされた趣旨に基づき、大東文化学院が設立認可された。大東文化協会初代会頭に就任した遠吉は、初期よりの協会創設活動の中心者であった。

学院設立に先立ち、遠吉は学院設立を謳った協会趣旨説明のため山口県萩明倫館で講演会を開くなど各地を奔走した。そして1923(大正12)年8月11日、東京会館にて協会会員総会を開催し大東文化学院設立が提案・承認されると、同月22日には文部大臣宛設立申請がなされた。協会創設以降、1923(大正12)年9月20日に文部大臣より設置認可が下されるまでの間、学院開設準備として遠吉は「学院綱領並学則編制委員会」を設けて自らその委員長となり、東京帝国大学、京都帝国大学、私学の3者に意見を求めて慎重な学則の制定に当たっている。

1924(大正13)年2月11日に行われた大東文化学院開院式において、遠吉は祝辞として協会創設から学院の設立までのこういった経緯を纏々語り、学院及び学生に大いなる期待をかけたのであった。

父喬任と遠吉

遠吉の父である大木喬任は、周知のように初代文部卿をつとめた人物である。もと佐賀藩士であった喬任は、幕末の混乱期には佐賀藩士枝吉神陽義祭同盟に参加、尊王攘夷をととなえ、藩内改革を推進した。また、維新後は新政府のもと徴士として召されて参与職外務局判事となり、江藤新平とともに東京奠都の意見を献言した。東京府知事、元老院議長、枢密院議長、司法相などを歴任したほか、特に初代文部卿として学制の実施を行うなど近代的教育制度の導入や法典編纂の確立に尽力したことから、明治の六大教育家に数えられている。1884(明治17)年7月華族令制定により伯爵を授けられた。1899(明治32)年9月、67歳で死去した。

喬任の一人息子であり、幼少時より身体が弱かったことも手伝って鍾愛の中心となっていた遠吉は、学制の実施にあたった初代文部卿の子でありながら学校へはほとんど通わず、家庭教師が聘されて自宅で教育を受けるという環境で育った。遠吉は家にあった喬任の膨大な蔵書の中でも主に漢籍を攻究し、漢学を好んだ。そのため漢辞漢句を自由に駆使することができ、詩文や書にも秀でていた遠吉は、多くの作品を残している。

父子ともに豪胆で、知性にあふれ、学問では優に大家の域に達していたとされる。特に遠吉は多角的な趣味人であったことでも知られ、文人として書や詩のほかにも、絵画、彫刻、囲碁、謡曲、弓術、乗馬、水泳、船、釣り、自転車など、枚挙にいとまがないほどであった。また、父子ともに金銭に関しては散財家でもあり、地元の書生などから金の無心をされると、他から借金をしてでも希望額より多く与えたという。遠吉の代になるとさらに散財はすすみ、政治資金や保証人としての借金のために家屋を売り払うまでとなった。

遠吉が28歳の年、父喬任が亡くなる。その死とともに伯爵を襲爵し、貴族院に当選してから後、大木遠吉の公的な活動が本格的に始まるのである。

(大東文化歴史資料館 浅沼薫奈)



大木遠吉



大木喬任

◆ 展示品から 「名」と「号」

「号」とは、本来他人が相手を尊敬したり敬ったりして、その相手に関わりの有る別の呼び方をするものである。号には、「萬屋」等の屋号や「春風亭」等の芸号、或いは画家の画号、書家の書号等々があり、これらは一種の職業的別名、つまり芸能人の芸名と同じであれば、堂々と名乗っても何ら問題無い。

問題は「雅号」である。雅号は職業的なものではなく、それこそ人様が名を呼ぶのを憚って呼んでくれるもので、自らこれ見よがしに名乗るものではない。まして私信に書くなど、愚の骨頂である。

例えば、司会者が「ただ今平沼機外先生が到着されました」と言っても、本人は決して「機外」とは言わず、「ただ今ご紹介賜りました平沼騏一郎です」と名を名乗るのである。

そこで、ここに呈示した大木氏の七言対の書幅二本を見比べて頂きたい。一本は「天籟」と雅号を書し、一本は「大木遠吉」と名を書してある。名を書した方には、「為安田君」との為書きがあり、号の方には何も無い。

恐らく大木氏は、為書きの有る方は、安田君に宛てた私信に等しいとの判断から号では無く本名を記されたのであろう。同じ書幅であっても、それが如何なる性質の品かに基づき、名と号を使い分けている点は、漢学の教養に依拠した大木氏の高見識を示すものであり、「流石である」と感服せざるを得ない。

たかが「号」、されど「号」である。その使い方一つに困って、その人の見識の高さと教養の深さを示すものにもなれば、逆に無知と無教養をさらけ出すものにもなる。故に「号」の使用には、慎重であらねばならないと自戒するこの頃である。

(中国学科教授 中林史朗)



平生不作蹙眉事 平生蹙眉の事を作さざれば天下應無切齒人 天下應に切齒の人無かるべし 為安田君 伯爵大木遠吉画 (大東文化大学中国学科教授 中林史朗氏蔵)



半窗月落梅無影 半窓に月落ちて梅に影無く三逕に風来りて竹に声有り 天籟画 (大東文化大学中国学科教授 中林史朗氏蔵)



(大東文化大学日本文学科准教授 浜口俊裕氏蔵)

◆ 展示品紹介

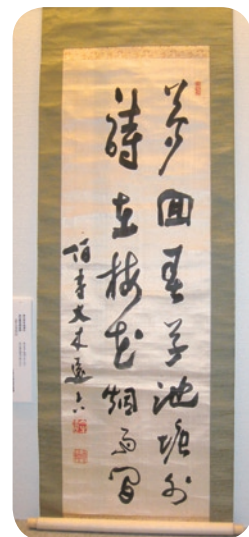
左下方に「天籟逸史」の自署、その下に陰刻印「大木遠」、陽刻印「天籟」の落款印を押す浜口俊裕架蔵の本軸は、南宋の詩人于石の「西湖」と題する七言律詩「西湖勝概甲東南。滿眼繁華今几年。鐘鼓相聞南北寺。笙歌不斷往來船。山園花柳春風地。水浸樓台夜月天。士女只知游賞樂。誰能軫念及三邊。」の第五句と第六句「山園花柳春風地。水浸樓台夜月天」によっている。三方を緑豊かな山に囲まれた西湖は、中国浙江省杭州市の代表的な景勝地である。転句に相当する部分を書する二行は、「山」「水」・「風」「月」・「地」「天」を対比させ、また春夜の湖面上空に満月が懸かる景を「春」「夜」の対置で切り取り、西湖春夜の浪漫的幽艶な至上の風情美を謳う。

(大東文化歴史資料館運営委員・日本文学科准教授 浜口俊裕)

◆ 展示品紹介

第一句の「夢回春草池塘外」は、朱熹(南宋の人)の「偶成詩」に「少年易老學難成、一寸光陰不可輕、池塘春草夢、階前梧葉已秋聲」とあり、第三句の「未覺池塘春草夢」を踏まえた句である。朱熹の「偶成詩」は人の一生はあっという間に過ぎ去ることを述べたものであり、第三句は「若かりし頃の楽しみなどはあっという間」という意で、遠吉も朱熹と同様の青春時代の回想を述べたものと思われる。第二句の「詩在梅花烟雨間」の「烟雨」は「煙雨」のことで、雨に煙っている様子を言い、「梅花烟雨間」は梅雨の頃を言い表したものの。すなわち第二句は「詩を梅雨の頃に詠じた」という意で、第一句と合わせて解釈すれば、「若かりし頃の楽しみなどはあっという間に過ぎ去り、(晩年の)今は、梅雨の降りしきる中で詩を詠じている」という意味になるのか。因みに、『南史』謝惠連伝に、謝靈運(南朝・宋の人)が詩句を考えていたが終日いい句を思いつかず、その夜、夢の中で族弟の惠連に会い、たちまち「池塘生春草」の句を得たという故事があり、謝靈運の「登池上樓詩」にこの句が入っている。朱熹の「池塘春草夢」は謝靈運の「池塘生春草」を借りた可能性が高い。

(大東文化歴史資料館運営委員・文学部中国語学科准教授 吉田篤志)



夢回春草池塘外 夢は春草池塘の外に回り詩在梅花烟雨の間に在り (大東文化歴史資料館所蔵)

・・・コラム・来年度の在外研究・・・

来年度、London School of Economics and Political science (LSE) の国際関係史学部で、本学の在外研究制度を利用して、1年間研究して参ります。

私の専門である日本政治外交史を勉強するならアメリカに行くべきだと、多くの方に言われました。しかし、「不惑」の年を迎えるまでに、今まで続けてきた昭和戦前・戦時の外交史研究に一区切りを付けたいと思っているので、戦前の覇権国であるイギリスの空気を吸いながら勉強する道を選択しました。また、LSEを受け入れ先としたのは、今回快く受け入れを承諾してくれたDr.Antony Bestの研究関心が僕のそれと実によく似ていたからでした。実は私も彼もとある日本の外交官の研究で博士号をとったのです。いずれにせよ、世界有数の社会科学系大学で勉強できることは、今からとても楽しみです。

ところで、近年、「心の豊かさ」を求める European Way of Life、そして、古いものを古いからと言って排除せず、新しいものを新しいからと言って拒否しないイギリスの価値観が日本でも見直され始めています。折柄、「金融工学」に基くアメリカの魔術的な金融体制が崩壊し、政治経済の大変動が世界を覆い始めました。イギリスもこの金融工学の発祥の地のひとつですが、この変化の直中にあるイギリスに住む事は、変り行く世界の価値観、もしかしたら新しい時代の始まりを肌で感じるようになるかもしれません。新しい時代の始まりを遠い外国で実感することは心躍る体験であるに違いありません。

また、考えてみれば、世界の「東」のはじっこで生きている自分が、「西」の文明の中心の一つに触れることは、本学の「建学の精神」を実践することでもあります。「東西文明の融合」という精神の現代的意義とは何なのでしょう。このことについても、あれこれ考えてみようと思っています。

(大東文化歴史資料館運営委員・政治学科准教授 武田知己)

【大東アーカイブス活動記録】(2008年4月～2008年9月)

- | | |
|--|---|
| 4. 1 第5回企画展「大東文化学院創設をめぐる人々(1) 一井上哲次郎・新資料の紹介」公開 | 6. 21 自校教育「現代の大学」⑨ |
| 4. 12 自校教育「現代の大学」① | 6. 24 学外より所蔵資料照会・閲覧 |
| 4. 17 全国大学史資料協議会東日本部会・幹事校会 (於：武蔵野美術大学) 参加 | 6. 28 自校教育「現代の大学」⑩ |
| 4. 27 自校教育「現代の大学」② | 7. 1 全国大学史資料協議会東日本部会・幹事校会、研究会 (於：日本大学) 参加 |
| 5. 10 自校教育「現代の大学」③ | 7. 5 自校教育「現代の大学」⑪ |
| 5. 17 自校教育「現代の大学」④ | 7. 12 自校教育「現代の大学」⑫ |
| 5. 24 自校教育「現代の大学」⑤ | 7. 25 合同部会会議
歴史資料館運営委員会会議 |
| 5. 27 池田英雄氏(4期卒業生)来館・卒業写真・卒業証書等寄贈 | 岡田脩氏(元中国学科教授)より学内刊行物等寄贈 |
| 5. 29 全国大学史資料協議会東日本部会・総会(於：東海大学)参加 | 7. 30 東京大学史料室より企画展見学・資料照会のため来館 |
| 5. 31 ニュースレター『大東文化歴史資料館だより』vol.4発行
自校教育「現代の大学」⑥ | 8. 5 学外より所蔵資料照会・閲覧 |
| 6. 7 自校教育「現代の大学」⑦ | 9. 4 文書庫(書架等)整備竣工 |
| 6. 9 合同部会会議 | 9. 21 財団法人無窮会へ入会 |
| 6. 14 自校教育「現代の大学」⑧ | 9. 25 日本大学資料館設置準備室より企画展見学・資料照会のため来館 |
| | 9. 26 第5回企画展公開終了 |



2008(平成20)年5月、池田英雄氏(大東文化学院高等科4期生)が来館され、卒業証書や卒業写真、戦時訓練の集合写真などをご寄贈下さいました。いずれも戦時下・戦後の混乱期を越え、80年近い年月の間大切に保管されていた貴重な品々であり、大東文化学園史にとっても大変重要な資料となりました。

池田氏は山崎館長と歓談後、展示室などを見学されました。来校されたのは卒業以来とのことで、大東文化学園の発展の様子をご覧になり目を細めていらっしゃいました。



・・・資料ご寄贈のお願い・・・

大東文化歴史資料館(大東アーカイブス)では、卒業生や関係者の方々から資料のご寄贈をお願いしております。アルバムや写真、映像、教科書、講義ノートのほか、各種学園関係資料を探しています。ご提供いただける資料や情報がございましたら、下記までお気軽にご連絡ください。